

躓きの石・「聖書の矛盾」にどう向きあうか？

理事長 海野 道郎

26 あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです。27 洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです。28 そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです。

ガラテヤの信徒への手紙 3 章 26－28 節

宮城学院は、教職員の採用にあたって、「キリスト教に基づく教育に理解のあること」を要求しています。しかし、私の見るところ、多くの教職員は採用面接の時の状態に留まっているように思われます。宮城学院で働く間にキリスト教に関する理解を深めたり、さらにその状態から一步を踏み出して、キリスト者（いわゆるクリスチャン）になる人はあまりいないのではないのでしょうか。

そこで、本日は、「キリスト教に理解を持ってもキリスト者にはならない人が多いのはなぜか」、「何がキリスト者になることの障壁になっているのか」——この疑問を出発点に、一人の人間として、皆さんと一緒に考えたいと思います。

聖書を読む困難

キリスト教に関心を持った時、私たちはどうすれば良いのでしょうか。教会の門をたたく人もいます。入門書を開く人もいます。あるいはまた、身近なキリスト者にいろいろ尋ねる人がいるかもしれません。しかし、いずれにせよ、聖書を読むことを勧められるでしょう。そこで、多くの人は、聖書を読もうとするのではないのでしょうか。

しかし、仮に日本語に翻訳された聖書であっても、聖書の文字面を読むことは出来ても、そのテキストが何を言おうとしているのかを理解するのは、それほど容易なことではありません。なにしろ、新約聖書でさえ、イエスの死後数百年に渡って作られた多くの文書から選ばれ纏められたものですし、旧約聖書に至っては、紀元ゼロ年をさかのぼること数千年の長期間にわたって生まれた多くの文書を取捨選択してまとめられたものです。それが、私たちが今日（こんにち）手にしている聖書です。地理的にも文化的にも、日本から遠く離れた地中海沿岸地域などの話です。それぞれの文書が書かれた時代背景や先行文書との関係など、書かれた状況を知って初めて真っ当な理解が可能となる、と一般には考えられます。

しかし、その一方で、そのような地理的・歴史的背景知識を持ち、聖書自体の成立過程についての十全な知識を持った上で聖書を読むことなど、私を含めて、多くの人間には困難です。そしてまた、学者や聖職者の専有物であるべきでない聖書は、そのような知識なしにも読める書物でなければなりません。

好きな聖句と摘まみ食いの聖書読み

ただし、何の心構えもなしにただ読めばよいか、といえば、「それは違う」と私は思います。

聖書を読み進めると、あちこちに、印象に残る言葉が出てきます。信者はそれを「私の好きな聖句(聖書の言葉)」として記憶し、折に触れて思い出し、生活の支えとしています。私自身の好きな聖句の一つは、「わたしは裸で母の胎を出た。裸でそこに帰ろう。主は与え、主は奪う。主の御名はほめたたえられよ。」というヨブ記(1:21)の中の言葉です。

しかし、聖書の中に自分が気に入った言葉や感動した言葉を見出して、「聖書はなかなか良いことを言っている。そのような書物を聖典としているキリスト教は素晴らしい。」として、そこに留まっているとしたなら、それはキリスト教に触れたことにはなりません。ましてや、キリスト教を理解したとは言えません。それまでに形成してきた自分の考えを基準として、共感できる部分を選び取ってきただけで、本人の思想に対して聖書は影響を及ぼしていないのです。聖書の中の自分が好む個所を摘まみ食いしているだけで、聖書自体には対面していないのです。このような読み方について、加藤常昭さんは、彼が初めて書いた『聖書の読み方』(日本基督教団出版部,1961年)の中で、次のように言っています。

自分が気に入った一言一句だけを拾い出してきて、なかなか聖書は良いことを言っているなどと喜ぶことがどんなにつまらないことかはすぐにおわかりでしょう。しかも、そういうことがよくあります。(10頁)

ちなみに加藤常昭さんは、長らく鎌倉雪ノ下教会の牧師や東京神学大学の教授をしていた人ですが、とてつもなくたくさんの著書や翻訳書を著わしています。嶋田順好前学院長の先生でもあります。

奇跡・矛盾・不条理：聖書への接近を妨げるもの

そこで、このような摘まみ食いを否定し、聖書の考えを理解しようとするとき、私たちは困難に直面します。第一に、奇跡の問題があります。水の上を歩いたり、パン5つと魚2匹を分けて食べたら男だけでも5千人が満腹になった上に余りがでた、など、今日の科学的知識や社会常識に照らして納得できない、という問題です。第二に、聖書を構成する文書間に存在する論理的な矛盾に対してどのように考えるか、

という問題です。第三に、神義論の問題があります。慈しみ深い全能の神が支配するこの世に、なぜ、かくも多くの不条理が発生するのか、という問題です。今日は、このうち二番目の問題、つまり、文書間の矛盾について検討しましょう。

パウロにおける矛盾

まずは、さきほど読んだ聖書のテキストを再確認しましょう。「ガラテヤの信徒への手紙」3章の26節から28節でしたね。新約聖書の346頁から347頁です。

²⁶ あなたがたは皆、信仰により、キリスト・イエスに結ばれて神の子なのです。

²⁷ 洗礼を受けてキリストに結ばれたあなたがたは皆、キリストを着ているからです。

²⁸ そこではもはや、ユダヤ人もギリシア人もなく、奴隷も自由な身分の者もなく、男も女もありません。あなたがたは皆、キリスト・イエスにおいて一つだからです。

このテキストを聴いて、皆さんはどのように感じたでしょうか。「当たり前ではないか」と思った人も多いと思います。あるいは、「著者のパウロは民族差別からも階級差別からも性差別からも解放されている。二千年も前なのに素晴らしい。」と思った人もいるのではないのでしょうか。

ところが、さらに聖書を読み進めるとき、皆さんは次のような疑問を抱くのではないのでしょうか。「このように優れた能力を持ったパウロが、なぜ、他の箇所では、多くの現代人が賛同できない差別的な発言をしているのか？」という疑問です。たとえば、「コリントの信徒への手紙一」の中で、パウロは次のように述べています(14:33b-35)。(新319頁)

^{33b} 聖なる者たちのすべての教会でそうであるように、³⁴ 婦人たちは、教会では黙っていなさい。婦人たちには語ることが許されていません。律法も言っているように、婦人たちは従う者でありなさい。³⁵ 何か知りたいことがあったら、家で自分の夫に聞きなさい。婦人にとって教会の中で発言するのは、恥ずべきことです。

この部分についてはいろいろな議論が交わされているようですが、その中身には今日は立ち入りません。いずれにせよ、この意見に接した皆さんの多くは、「共感できない」、「受け入れるのは難しい」と思ったのではないのでしょうか。この二つの手紙は、相手とその状況が異なっているとはいえ、同じパウロの発言です。そして、私たちの多くは、その一方を受け入れ、もう一方を受け入れませんでした。では、われわれは、どのような基準によって、異なった判断をしたのでしょうか。またパウロという人間を、パウロの書簡を、さらには聖書全体を、われわれは自らの判断基準の中でどのように位置づけたら良いのでしょうか。

矛盾を孕む新約聖書

新約聖書の研究者・加藤隆さんは一般向けの入門書『「新約聖書」の誕生』(講談社[選書メチエ 163],1999)中で、次のように述べています。ちょっと長いのですが、紹介しましょう。

本書は新約聖書についての本なので、新約聖書には全体として何が書かれているかを簡単に紹介すべきかもしれない。しかし、そのようなことは不可能である。つまり、新約聖書の内容には全体として何か統一的な主張があると考えがちだが、じつは新約聖書の各文書では、多くの場合、互いに相容れない立場が主張されていると言った方が適切である。もちろん、ある程度は似たような立場の文書もある。しかし、対立している場合には、大変大きな立場の相違がある。

たとえば福音書は四つあるが、簡単に述べるならば、他の福音書の立場と相容れないところがあるから、別の福音書が書かれたのである。こうしたことは新約聖書の各文書をいくらか丁寧に読めば気づくことだが、なかなかそのようには了解されていないようである。新約聖書の内部で立場の対立などあるはずがないという先入観があるためだと考えられる。(9-10 頁)

この点について、ある牧師さんと話していた時、彼女は「ある種の宗教は、論理的矛盾のない一貫した教義を持っているのに対して、聖書は矛盾を含んでいる。しかし、それだからこそ聖書は素晴らしいのだ」という趣旨の発言をしました。詳しい理由は尋ね損ねてしまいましたが、この発言は、なかなか味わい深いように思われます。論理的矛盾を超えたところに真実が存在する、と考えられるからです。

そもそも、われわれが現在手にしている新約聖書は、イエスが十字架上で殺されてから数世紀の間に生まれていた多数の文書の中から、27 の文書を選んで纏めたものです。その過程で脱落した文書も多数存在しますし、そもそも、聖書を編纂しようという試み自体も、一つではありませんでした。聖書は、歴史的産物なのです。この間の事情は、田川健三さんの『書物としての新約聖書』(勁草書房、1997 年)に詳しく書かれていますし、先ほど紹介した加藤隆さんの『「新約聖書」の誕生』にも記されています。

では、そのようにして選ばれた、いわば選りすぐりの文書の集合体が、一つの論理の下に統一された内的矛盾の無いものとなっているか、といえば、先ほど紹介した加藤隆さんの言葉にもあるように、そうではないのです。それはなぜでしょうか。私は、次のように考えています。私は聖書学者ではありませんし、ここは学会発表の場でもありませんので、私は、これから話す考えが私のオリジナルだ、と主張するものではありません。同じような考えが、すでに存在するに違いありません。

聖書が矛盾を孕む理由

そもそも、なぜ、聖書という一冊の書物の中に矛盾する考えが混在しているのでしょうか。

これに対する第一の答えは、「現代のわれわれには矛盾しているように見えるが、聖書編纂にかかわった人々にはく論理的矛盾」という視点、観念がなかったのだ」、というものです。しかし、この考え方が成り立たないことは、明らかなです。紀元前4世紀を生きたアリストテレスにすでに「論理学」と題する著作があり、その中では、今に通じる論理原則が語られています。思想的にも、キリスト教はギリシア哲学の影響と共に発展しました。当時の一級の知識人であった新約聖書の編纂者にとって、ギリシア哲学は前提知識だったに違いありません。

第二の答えは、新約聖書の編纂者集団の中に考え方の違う人たちがおり、それぞれが推薦する文書の優先順序には違いがあり、その妥協の産物として27の文書が選ばれた、というものです。事実、そのようなことがあったようです。その結果、文書間に矛盾が存在することになりましたが、彼らはそれを「良し」としたのです。それはなぜでしょうか。

新約聖書の編纂者たちが、収録する27の文書の間に矛盾が存在することは十分に自覚していたにもかかわらず、相互に矛盾する複数の文書から一つだけを取り出して、論理的矛盾のない文書だけで聖書を構成しよう、とすることを放棄した、あるいは断念した、のはなぜでしょうか。

それは、候補となった個々の文書の間に存在する論理的な矛盾を超えた真実が存在すると考えたこと、つまり、論理一貫した聖書を強引に編纂するには、自分たちの力が不十分であることを正しく自覚していたためだ、と考えられます。神様のことを人間の言葉で表現し尽くすことがほとんど不可能であることを、彼らは自覚していたのです。

聖書内の論理矛盾：障壁から誘因に

現在の私自身も、この第三の答えを、自分が共感できる答えだと考えています。聖書の各所に散らばる矛盾を超えて何を選び取るか、その責任が、後代の我々に委ねられている、そのように考えるのです。

今日は、聖書の中に含まれる論理的矛盾についてどのように考えたらいいか、私の考えを紹介しました。初めにもお話ししたように、私は、宮城学院に働く皆さんが、宮城学院のバックボーンであるキリスト教と正面から向き合うことが少ないのではないかと考えています。そして、そのような事態を生み出している原因の一つが、聖書の中に散在する論理的矛盾ではないか、と考えています。しかし、矛盾の存在こそが、言葉では表現しきれない神様について私たちがなお知ろうとする誘因となりうるものです。

本日の私の話は、そのことを指摘することによって、多くの知的人々から聖書を遠ざけている一つの障害を「誘因に転化させよう」というものでした。皆さんは、どのようにお考えでしょうか。

【祈りましょう】 万物を統べたもう私たちの神様。この世界を創りたまひしあなたを、私たちは、自らの限られた認知能力、限られた情報処理能力をもって理解しようとあがいています。まったく理解が不可能であることを自覚しつつも、そうせざるを得ないので。

そのような私たちは、先ごろ、清野貞代姉妹を天に送りました。愚かな私どもには、まったく予期せぬ出来事でした。宮城学院中高の音楽教育を発展させ、同窓会活動にも尽力なされた生涯でした。6月初めに同窓会長に就任し、宮城学院理事としてもご活躍いただくことを誓ったばかりでの召天は、私どもにとって大きな悲しみであります。神の御心を測りかねている私どもですが、姉妹の志を受け継ぎ、あなたの創りたもうた宮城学院の発展に力を注ぎたいと思います。

弱く愚かな私どもが、宮城学院の中で、あなたのみ旨にかなった働きができるよう、支え、お導きください。

この願いと祈り、主イエスキリストの御名を通して御前にささげます。 アーメン。

(2022 年 6 月 22 日)